

第2回尖石縄文文化賞

受賞者: 勅使河原彰

尖石縄文文化賞条例にもとづく、同賞の選考委員会は、矢崎和広市長の諮問を受け、委員4名の出席の下に、9月20日、尖石縄文考古館で行われた。

今回、選考・審査の対象となったのは、自・他薦を含めて、個人10、団体1の合計11件であった。候補者の内訳は、年齢的には30歳代から80歳代におよび、研究者としての所属機関等、および職業など非常に幅広い層からなり、また寄せられた「受賞の対象となる研究及び活動の業績」についても、宮坂英式が尖石遺跡等の発掘や研究をつうじてめざした、縄文時代の歴史の本質に迫る、すぐれた研究と活動を示すものが大部分であった。このことは、本年第2回目を迎えた本賞の制定の趣旨が、広く学界等一般に理解された結果として、誠に喜ばしいことである。

こうしたすぐれた多くの候補者を得て、選考委員会は慎重な審議を重ねた結果、第2回尖石縄文文化賞の受賞者として、勅使河原彰氏（埼玉県）を、全会一致で推薦することに決定した。

同氏は1975年大学卒業後、東京都内の小・中学校の職員として勤務するかたわら、文化財・自然保護の活動に熱心にとりくむ一方、とくに日本考古学史を中心とした研究を続け、1988年に出版した『日本考古学史』（東京大学出版会）をはじめとする関連著書は、学史の重要性を学界一般や若い研究者に理解させる上に役立つ業績として高く評価された。

また、尖石や八ヶ岳山麓の遺跡群をとらえた集落論、さらに考古資料にもとづく時代区分論などの業績を経て、1998年に出版された『縄文文化』（新日本新書）は、縄文時代に関する歴史叙述の、現時点での一つの到達点を示す労作として、学界でも高く評価され、研究者のみならず、広く一般読者に迎えられている。

在野にあって、勤務のかたわら研究にはげみ、いくつかのすぐれた著書などをまとめて、考古学のあるべき姿を市民とともに追求し続ける姿勢は、宮坂英式の学問的精神にも深くつうじ、茅野市が本賞を制定した意義にそった、まことにふさわしい受賞者である。

2001年9月27日

宮坂英式記念尖石縄文文化賞選考委員会

委員長 戸沢充則

副委員長 樋口昇一

委員 小林達雄・佐原真・鈴木公雄



第2回受賞者 勅使河原 彰 氏